

# 「表現運動・ダンス」におけるリズムの概念

松尾千秋  
(2015年10月5日受理)

Concept of Rhythm in "Expressive Activity and Dance"

Chiaki Matsuo

**Abstract:** In this research, I had for my object to consider the concept of rhythm of the Courses of Study, to settle the various confusion around the Rhythm Dance, focusing on "Expressive Activity(elementary school) and Dance(secondary school)". Rhythm of the present Course of Study is used in the running long jump and running high jump etc., and I can think those are used as some orders of the movement. On the other hand, rhythm used as music (or, the musical genre) of rock, samba and hip hop in "Expressive Activity and Dance". And there are examples which catch "rock music" as "lock dance". Thus there is various confusion about the concept of rhythm and "Rhythm Dance" in "Expressive Activity and Dance". To settle that, it's necessary to reconsider the concept of rhythm in "Expressive Activity and Dance" made with movement of a body. And it's also necessary to specify about a relation between "Expression and Creative Dance" and "Rhythm Dance and Contemporary Rhythmic Dance".

Key words: expressive activity, dance, rhythm, course of study

キーワード：表現運動，ダンス，リズム，学習指導要領

## 1 はじめに

戦後、わが国の学校体育における「表現運動（小学校体育科における領域の名称）・ダンス（中学校、および、高等学校の保健体育科における領域の名称）」の教育は、従前の既成作品の指導から創造的自己表現へと大きく転換され、「スポーツの『競争性』、体操の『補強矯正と体力づくり』と並んでその『表現性』をもって質的に比肩しうる運動文化として認められ」（島内、2011）、体育の一領域として位置づけられた。

「表現運動・ダンス」は、平成元（1989）年の中学校学習指導要領において男女共修となるまで、「表現・創作ダンス」と「フォークダンス」の二つを主たる内容とし、長年にわたり、「ダンス」については「主として女子に履修させる」とされていた。

その後、内容が厳選された平成10（1998）年の小学校学習指導要領、中学校学習指導要領において、「現代の子どもや若者がアップテンポのリズムに乗って自

由に踊ることに大きな楽しみを見出しているという実態があり、また、体育授業としてダンスが一層積極的に実践されていくことを期待して」（高橋、1999）、「リズムダンス（小学校）・現代的なリズムのダンス（中学校、高等学校）」の内容が新しく導入された。

しかし、「リズムダンス・現代的なリズムのダンス」という新しい内容については、「リズムの特徴をとらえて、リズムにのって踊ることが困難である」、「『リズムダンス』では（中略）どの曲がかかっても単調で同じ動きの連続であった」（土井・川口、2007）、あるいは「児童にとってはリズムダンスはダンス経験の乏しさやこれまでに獲得した運動技能を活かす場面が少ないなどの理由から、自己課題を設定しにくく、学びの深まりが得られにくい」（古川、2011）、さらに、「指導要領（平成10、11）における現代的なリズムのダンスの導入から10年が経過する中で、体育科教育誌上における中学校・高等学校の実践報告として、現代的なリズムのダンスに関わる授業実践の報告は見られな

かった」(相馬, 2011) など、指導の実際に関わって様々な問題点が指摘された。また、平成元年から平成24年までの間の女子体育誌に記述された「リズムダンス・現代的なリズムのダンス」の関連内容について、「同じ用語で記されている、その意味するところは様々である」(松尾, 2013) という指摘もある。

このように、「リズムダンス・現代的なリズムのダンス」の導入によって、「ダンス領域は選択幅を広げたが、ダンスの内容論議が起こった」(松本, 2011) ともされ、学校体育に導入されて10年以上を経過してもなおリズム系ダンスに関する論議は拡大、混乱の様相を呈していたと考えられる。

一方、平成20(2008)年の中学校学習指導要領において、第1学年及び第2学年の保健体育科の「武道」, 「ダンス」を含むすべての領域が男女必修となったことを契機に、学校体育における「ダンス」はマスコミなどをも賑わし、一躍注目されることとなった。しかし、その様相には、学校体育における「ダンス」が、長年、女子の履修を中心としていたとはいえ、運動文化としての独自性のゆえに学校体育における確固たる位置づけがあったにもかかわらず、まるでそれまで「ダンス」が学校体育の中に位置づいていなかったような誤謬も多くみうけられ、社会的認知の対象としてのダンスは、ヒップホップダンスに代表される、いわゆるストリートダンスに関連するものを指している場合が多いのではないかと推測される。

男女必修化に伴う「ダンス」授業の変容を調査した中村(2009)は、「現代的なリズムのダンスが最も多く採択されるようになってきていたが、その内容には混乱が見られた」とし、また、村田(2015)も「その授業の多くが決まった振り付けを与え覚えて踊る『振り付け習得型』であり、リズムに乗って自由に踊るのが楽しい『リズム系ダンスの特性』とは程遠いものとなっている」とし、「学校のダンス授業と社会でのダンス教室との棲み分けと連携」について言及しつつ、「学校のダンス授業」と社会におけるダンス教室でのレッスンとの相違を強調している。

文部科学省(2013)は、授業に資するための実技指導資料を作成し、「表現系ダンス」としての「表現・創作ダンス」においては、イメージをとらえたり深めたりして表現する「文化の創造」という価値を、また、「フォークダンス」においては、伝承されてきた踊りを踊って交流する「文化の伝承」という価値を、さらに、「リズム系ダンス」としての「リズムダンス・現代的なリズムのダンス」においては、リズムの特徴をとらえてリズムに乗って全身で踊る「人間に内在する根源的な律動(リズム)の生成」という価値をそれぞれに

持つ典型として、三つのダンスを例示している。しかし、「律動(リズム)の生成」ということがらはリズム系ダンスに限られるものではなく、舞踊・ダンス全般に関わる価値なのではないだろうか。

学校体育における「リズムダンス・現代的なリズムのダンス」の導入、さらに、「ダンス」を含むすべての領域の男女必修化により、生成、拡大された様々な混乱は未だ解決されないままであり、この問題解決は喫緊の課題であると考えられる。そこで、本研究においては、学校体育における「表現運動・ダンス」に焦点づけ、リズム系ダンスに関する様々な混乱を解決するため、あるいは、その内容論議を深める一助とするため、改めて、学習指導要領にみるリズムの概念について検討することを目的とした。

## 2 様々なリズムの概念

### 1) 辞典・事典にみるリズム

広辞苑(岩波書店)、大辞林(三省堂)、大辞泉(小学館)などの国語辞典にみるリズムには、「規則的な繰り返し」、「周期的な反復、循環、動き」、「運動、音楽、文章の進行の調子」、「詩の韻律、律動、節奏」、「周期的に現れる拍子」など様々な意味合いがある。

美学的見地から、福原(美学事典, 1974)は、リズムについての最も包括的な定義として「運動の秩序」をあげ、これを「拍節的リズム」、「定量リズム」、「自由リズム」の三つに分類している。すなわち、「拍節的リズム」とは、「拍節にもとづいて成立するリズムで、普通にみられるような一定の拍子をもった近世ヨーロッパの音楽はすべてこれに属する」。「定量リズム」とは、「各時価が一定の時間単位の倍数または分数によってはいるが、アクセントの規則的継起を欠くもので、中世の定量音楽などがこれに属する」。さらに「自由リズム」とは、定量的単位をもたない自由な歴時を用いるリズムで、東洋音楽やソレーム派の説くグレゴリオ聖歌リズムなどに認められるものである」として説明している。

また、野村(標準音楽辞典, 1966)は、「リズムというものが運動と時間と空間に関係することは確かであるが、どのような関係であるかは時代や民族や個人の見解に千差万別がある」とするとともに、リズムのもっとも包括的な定義として、プラトンの《ノモス》(法律編)における<運動の秩序>と、ウィレムスの「リズムとは運動と秩序の間の関連性である」という言説をあてている。

このように、辞典・事典にみるリズムは、最も包括的に「運動の秩序」があてられている。また、広辞苑

(岩波書店)によると、「秩序」は「物事の条理、物事の正当な順序。次第」とされており、さらに、「条理」には「すじみち。すじ。物事の道理」などの意味があることから、辞典・事典にみるリズムは、「運動のすじみち、順序」としてとらえなおすことができると考えられる。

## 2) 学説にみるリズム

リズム研究で著名な哲学者、クラゲス (L. Klages) (1971) は、「リズムの語が使われている領域はきわめて多方面にわたり、それだけにこの概念の理解のされかたも一様でない。(中略) いずれにせよ、周期的反復運動(または現象)としてリズムは理解されている」, 「Rhythmus (リズム) を字義どおりに解釈するならば、流れるもの、したがって、不断に持続的なもの」としている。また、「リズム」を「無意識的自然的反復動作」として、「拍子」を「意識的人為的反復運動」として対立させる一方において、ゆりかご運動を例にして、「事情によっては、拍子づけによりわれわれへの作用効果を強める」として、「リズムと拍子が、本質的に異なる発生源をもつにもかかわらず、人間のなかでたがいに融合しうる」、あるいは、「ある場合に、運動の持続性がリズムとして体験されるためにはまず拍子がそれに加わらなければならない、ということと矛盾しない」とし、リズムと拍子の対立説をさらに追究している。

また、運動学的見地から、マイネル (K. Meinel) (1981) は、「運動リズムはスポーツ運動の力動・時間的構造、流れるような緊張と解緊の交替と理解される。運動リズムは空間・時間的経過における力の入れ方の配分を表している」, 「リズムは力動・時間的経過の周期的分節を表し、タクトは一定の長さの時間の拍節上の区分をいう」としている。また、「リズムに乗った運動のしかたというもののはかならずしも音楽伴奏といっしょに行われるとは限らず、いわば、運動リズムは音から“分離できる”」としている。同様に、浅岡 (1990) は、運動リズムを「ある運動を実現するとき投入される力の種類や強度とその時間的経過の関係によって規定される、運動形態の一定の秩序」としている。

前述のクラゲス (1971) の言説にもあるように、リズムという文言が使われている領域はきわめて多方面にわたり、概念の理解のされかたも一様ではないものの、最も包括的な定義としては、ここでも「運動の秩序」があげられている。さらに、リズムは、①自由(変化)、②無意識的反復、③周期的分節として、その一方、タクトは、①拍節的、②意識的反復、③拍節上の区分として、基本的には対比的に位置づけられてい

る。しかし、「拍節的リズム」(福原, 1974) として分類されるリズムがあるように、リズムとタクトは対比的な位置づけのうえに立って、さらに「融合しうる」(クラゲス, 1971) という解釈が成り立つことも認識しておかなければならない。こういった解釈が、しかし、多くの混乱を引き起こす要因になっているとも考えられる。

## 3 学習指導要領にみるリズム

### 1) 体育・保健体育分野の「表現運動・ダンス」以外の領域にみるリズム

平成20 (2008) 年の小学校学習指導要領、同じく中学校学習指導要領の体育・保健体育分野のなかで、「表現運動・ダンス」以外の領域において、リズム(あるいは、リズムカルな)という文言の記述がみられるのは、「陸上運動(小学校)・陸上競技(中学校、高等学校)」領域の「走り幅跳び」や「走り高跳び」において、「リズムカルな助走から」と示されている箇所と、「ハードル走」において「リズムカルな走りから」と示されている箇所のみである(表1, 表2)。

さらに、平成20 (2008) 年の小学校学習指導要領解説体育編、同じく中学校学習指導要領解説保健体育編においては、「体づくり運動」領域の「体ほぐしの運動」の行い方の例として「リズムに乗って、心が弾むような動作で」(小学校第1学年から中学校第3学年まで共通)と示され、同じく「多様な動きをつくる運動遊び(小学校第1学年及び第2学年)」の例として、「リズムや方向を変えてはねる」、さらに、「多様な動きをつくる運動(小学校第3学年及び第4学年)」の例として、「速さやリズムの変化を付けたスキップやギャロップをして」、「体力を高める運動(小学校第5学年及び第6学年)」の例として、「リズムカルに走る」などが示され、中学校第1学年及び第2学年においては「大きくリズムカルに全身や体の各部位を振ったり(後略)」と示されている。

次に、同解説の「器械運動」領域の「平均台運動」においては、中学校第1学年から第3学年まで「姿勢・動きのリズムなどの条件を変えて台上を移動する」と示されている。また、「水泳」領域の「クロール」においては、「リズムカルなばた足をする」(小学校第5学年及び第6学年)、「一定のリズムで強いキックを打つ」(中学校第1学年及び第2学年)と示されている。

図1はハードル走などのリズムカルな走りのイメージを具体的に図示した例である。ここに典型的に示されるように、学習指導要領の体育・保健体育分野の「表現運動・ダンス」以外の領域にみるリズムに関する記

表1 小学校学習指導要領にみるリズム

第9節 体育
第1学年及び第2学年
<p>F 表現リズム遊び</p> <p>(1) 次の運動を楽しく行い、題材になりきったりリズムに乗ったりして踊ることができるようにする。</p> <p>イ <u>リズム遊び</u>では、<u>軽快なリズム</u>に乗って踊ること。</p>
第3学年及び第4学年
<p>F 表現運動</p> <p>(1) 次の運動の楽しさや喜びに触れ、表したい感じを表現したり <u>リズム</u>の特徴をとらえたりして踊ることができるようにする。</p> <p>イ <u>リズムダンス</u>では、<u>軽快なリズム</u>に乗って全身で踊ること。</p>
第5学年及び第6学年
<p>C 陸上運動</p> <p>(1) 次の運動の楽しさや喜びに触れ、その技能を身に付けることができるようにする。</p> <p>ウ 走り幅跳びでは、<u>リズムカルな助走</u>から踏み切って跳ぶこと。</p> <p>エ 走り高跳びでは、<u>リズムカルな助走</u>から踏み切って跳ぶこと。</p>

\* 文部科学省（2008c）より抜粋。下線は筆者が挿入。

表2 中学校学習指導要領にみるリズム

第7節 保健体育
第1学年及び第2学年
<p>C 陸上競技</p> <p>(1) ア (中略) ハードル走では、<u>リズムカルな走り</u>から滑らかにハードルを越すこと。</p> <p>イ (中略) 走り高跳びでは、<u>リズムカルな助走</u>から力強く踏み切って大きな動作で跳ぶこと。</p>
<p>G ダンス</p> <p>(1) 次の運動について、感じを込めて踊ったり皆で踊ったりする楽しさや喜びを味わい、イメージをとらえた表現や踊りを通じた交流ができるようにする。</p> <p>ウ 現代的な<u>リズム</u>のダンスでは、<u>リズム</u>の特徴をとらえ、変化のある動きを組み合わせ、<u>リズム</u>に乗って全身で踊ること。</p>
第3学年
<p>C 陸上競技</p> <p>(1) イ (中略) 走り高跳びでは、<u>リズムカルな助走</u>から力強く踏み切り滑らかな空間動作で跳ぶこと。</p>
<p>G ダンス</p> <p>(1) 次の運動について、感じを込めて踊ったり、みんなで自由に踊ったりする楽しさや喜びを味わい、イメージを深めた表現や踊りを通じた交流ができるようにする。</p> <p>ウ 現代的な<u>リズム</u>のダンスでは、<u>リズム</u>の特徴をとらえ、変化とまとまりを付けて、<u>リズム</u>に乗って全身で踊ること。</p>

\* 文部科学省（2008a）より抜粋。下線は筆者が挿入。



図1 リズムカルな走りの例（岡野，2010）

述は、何らかの動き（あるいは、運動）の秩序や反復の概念で用いられていると考えられ、こういったリズムにのることができなければ、最高のパフォーマンスを得ることもできないのである。

## 2) 「表現運動・ダンス」の領域にみるリズム

小学校の「表現リズム遊び（小学校第3学年から第6学年における『表現運動』に該当する小学校第1学年及び第2学年における領域の名称）・表現運動」領

表3 「リズムダンス・現代的なリズムのダンス」のリズムと動きの例

	小学校3・4年	中学校1・2年	中学校3年
リズムに乗って 全身で自由に踊る	<ul style="list-style-type: none"> <li>・軽快なリズムに乗って全身で踊る</li> <li>・ロックやサンバの<u>リズム</u>の特徴をとらえて踊る</li> <li>・友だちと自由にかかわりあって踊る</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ロックやヒップホップの<u>リズム</u>に乗って全身で自由に弾んで踊る</li> <li>・ロックやヒップホップの<u>リズム</u>の特徴をとらえて踊る</li> <li>・簡単な繰り返しの<u>リズム</u>で踊る</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・<u>リズム</u>に乗って体幹部を中心に全身で自由に弾んで踊る</li> <li>・ロックやヒップホップの<u>リズム</u>の特徴をとらえて踊る</li> <li>・仲間とかかわり合って踊る</li> </ul>
まとまりを付けて踊る	<ul style="list-style-type: none"> <li>・変化を付けて続けて踊る</li> <li>・友だちと調子を合わせて踊る</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・<u>リズム</u>に変化を付けて踊る</li> <li>・仲間と動きを合わせたりずらしたりして<u>リズム</u>に乗って踊る</li> <li>・変化のある動きを組み合わせ続けて踊る</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・踊りたい<u>リズム</u>や音楽の特徴をとらえて踊る</li> <li>・変化とまとまりを付けて連続して踊る</li> </ul>
発表や交流	<ul style="list-style-type: none"> <li>・発表や交流をする</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・動きを見せ合って交流する</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・簡単なまとまりを付けて発表し見せ合う</li> </ul>

\* 文部科学省（2008b, p.132）より。下線及び題目の「」は筆者が挿入。

域において、リズム（あるいは、リズムカルな）という記述がみられるのは、小学校第1学年及び第2学年の「リズム遊び」の「軽快なリズムに乗って踊る」という箇所と、同じく第3学年及び第4学年の「リズムダンス」の「軽快なリズムに乗って全身で踊る」と示されている箇所である（表1）。また、中学校第1学年及び第2学年の「現代的なリズムのダンス」の「リズムの特徴をとらえ、変化のある動きを組み合わせ、リズムに乗って全身で踊る」という箇所と、同じく第3学年の「リズムの特徴をとらえ、変化とまとまりを付けて、リズムに乗って全身で踊る」と示されている箇所である（表2）。

平成20（2008）年の中学校学習指導要領解説保健体育編には、この「リズムダンス・現代的なリズムのダンス」に関して、小学校学習指導要領解説体育編において示されている内容と比較しながら学年ごとに示されている例がまとめられている（表3）。まず、小学校第3学年及び第4学年では、「軽快なリズムに乗って」、「ロックやサンバのリズムの特徴をとらえて」と示され、中学校第1学年及び第2学年では、「ロックやヒップホップのリズムに乗って」、「ロックやヒップホップのリズムの特徴をとらえて」、「リズムに変化を付けて」、「リズムに乗って」と示され、さらに、中学校第3学年では、「リズムに乗って」、「ロックやヒップホップのリズムの特徴をとらえて」、「踊りたいリズムや音楽の特徴をとらえて」と示されている。

これらの例示から、現行の小学校学習指導要領、中学校学習指導要領の「表現運動・ダンス」領域にみるリズムの概念は、「リズムダンス・現代的なリズムのダンス」の内容のみに関して示されており、他の領域にみるリズムの概念とは異なり、主としてロックやサンバ、ヒップホップなどの音楽（あるいは、音楽ジャ

ンル）の概念で用いられていると考えられる。しかし、表3には、中学校第1学年及び第2学年の「まとまりを付けて踊る」ということがらに関して、「リズムに変化をつけて踊る」という記載があり、これは周期的反復運動（または、現象）や運動リズムの概念で用いられており、同一の表中に異なる概念が含まれているのではないかと考えられる。

以上のように、現行の学習指導要領や同解説において、「表現運動（表現リズム遊びを含む）・ダンス」領域にみるリズムは、「リズムダンス・現代的なリズムのダンス」のみに関して示されている。

振り返って、昭和44（1969）年の中学校学習指導要領においては、「ダンス（女子）」領域の「創作ダンス」の「イ 表わし方」に、「個人や集団で表わしたい感じにふさわしく、リズム、強度、身体の動きおよび場所の使い方を変化・発展させて表現すること。」と示されており、リズムという言葉は「創作ダンス」に関するキーワードでもあった。次なる昭和52（1977）年の中学校学習指導要領における「ダンス」領域の内容については、「ア 楽しく軽やかで滑らかな感じの表現」、「イ 激しく対立する感じの表現」、「ウ 力強くまとまって活動する感じの表現」という三つの「感じ」が示されるのみであり、フォークダンスは主たる内容から削除されていた。さらに、平成元（1989）年の中学校学習指導要領においては、「ア 創作ダンス」、「イ フォークダンス」という名称のみが記載されており、従前のような内容に関する記述はない。「表現・創作ダンス」に関しては、その具体的な内容が変更されているとは考えにくいにもかかわらず、現行の学習指導要領や同解説においては、リズムという言葉による記述などが一切みられなくなり、この点において従前の学習指導要領などとの齟齬をきたしていると考え

られる。

## 4 舞踊教育研究者などの言説にみるリズム

### 1) 表現系ダンス探究の時代

リズムについて、松本(1957)は、「広い意味では、“現象の規則的に反復される場合”をさしている。西洋音楽では、各音の長さの比率をリズムといい、音運動の秩序としている。そして、これらの各音の長さの比率の進行に対して規則的な経過をつくるものをタクトといっている。いわば、タクトは、リズムの原初的で、原動的な基盤ということができよう。そして、リズムは、この原動的な規則正しい枠にしたがいながら、その中を自由に駆使し、単調を破るものである」と述べている。

また、動きのリズムについて、村浦(1973)は、「動きのリズムの概念は音楽のリズムの概念と理論的には共通している」とし、「動きのリズムを構成する要素は、速度、アクセント、リズムパターンの3つがある。ただし音楽にあるような単純な拍子がない」と述べている。

この時代、音楽とダンスにおけるリズムの相違が追究され、リズム(あるいは、動きのリズム)は表現系ダンスの主要な概念として論じられていた。

### 2) リズム系ダンス導入の時代

リズム系ダンスが学校体育に導入されることとなった時代、村田(1988)は、「リズムは、生命の根源に根ざし、ダンスを成立させる基本的要因のひとつとされる。緩急・強弱が周期的に繰り返される構造をもち、規則性とそれを破る変化の両面の性格からなる」とし、「リズムダンス」を「ジャズダンス、ディスコダンス、エアロビックダンス、ブレイクダンスなど、音楽のリズムによって踊るダンスの総称」としている。さらに「リズムダンスでは、音楽のリズムやテンポへの『のり』が強調され、そこに律動を快とする本能的な陶酔の楽しさがある」、「創作ダンス(表現)では、より自由で不規則的の起伏をもつ動き(感情)のリズムが強調される」と述べている。ここでは、リズムに「規則性とそれを破る変化の両面の性格」を見出すとともに、「リズムダンス」と「創作ダンス」とを対比的にとらえ、それぞれのダンスのリズムの相違について述べている。

また、山田(1992a)は「リズムによって動く(踊る)ことは楽しい(好きな)のだが、自己表現は恥ずかしい(嫌い、難しい)という、リズムと表現が対峙するかのような風潮も起こってきている。」と指摘し

つつ、ダンスの教材を、「覚える-踊る:フォークダンス、社交ダンス、民踊」、「創る-踊る:ジャズ・ダンス、リズム・ダンス」、「覚える-見せる:伝統芸能、既成作品」、「創る-見せる:創作ダンス」の四つに分類し、「ジャズ・ダンス、リズム・ダンス」を「音楽のリズムや運動の型を基盤として、変化・発展させ、友だちと創り、踊ることを楽しむことを中心としたダンス体験」としている。ここでは、「リズム・ダンス」が「ジャズ・ダンス」と並列されており、村田(1988)が「リズムダンス」をジャズダンスを含む「音楽のリズムによって踊るダンスの総称」とする見解とは異なるものであると考えられる。

さらに、三浦ら(1997)は、「音楽とともに多様なダンスステップが流行し始める20世紀のリズム型のダンス(リズムによって踊るダンスをリズム型のダンスと呼称する)」にとらえ、ディスコ、ロック、サンバを、「リズムの単純さから合わせたりのったりすることが優しいと考えられる」リズムの例とし、さらに、ジャズ、ラップを、「変化性を楽しむ深まった段階での取扱いにふさわしいと考えられる」リズムの例として示し、「リズムの難易性」について言及している。さらに、リズムダンスの学習のねらいを、「多様なリズムの特性を理解し、リズムにあった動きの連続で工夫し、踊って楽しむ」こととし、リズムダンスの学習過程に関しては、「リズム享受のプロセスは、リズムに「合わせる」<自己統御の場>ことからはじめ、次にリズムに「乗る」<生命開放の場>ことを学習し、そして、リズムを自由に「作り出す」<精神を触発し生命を刺激する場>段階に学習を深めていくことができる」としている。ここでは、村田(1988)の見解と同様に、「リズムによって踊るダンスをリズム型のダンス(リズムダンス)」と総称し、リズムを音楽(あるいは、音楽ジャンル)としてとらえ、リズムの「乗り」を学習過程の一つに位置づけている。

以上、リズム系ダンス導入の時代にも、リズムダンスの概念や位置づけ、リズムののりに関して諸説存在しており、共通的な概念として確立されるには至っていなかったのではないかと考えられる。また、表現系ダンスとリズム系ダンスにおけるリズムの概念をめぐっては、類似点あるいは相違点が追究されており、この時代、「創作ダンス」に関しても、リズムや律動といった文言が用いられ、議論の対象となっていた。

### 3) ダンス必修化の時代を迎えて

その後、中学校第1学年及び第2学年における全領域男女必修の完全実施を迎え、DVD付きの啓蒙書などが多く出版され、動きとリズムに関する議論はさらに多様に展開されることとなる。

伊大知・村瀬（2012）は、「リズムは『8カウントで成り立っている』こと、そして、「リズムには『オン・オフがある』』としている。また、日本ストリートダンス協会・エイベックス・プランニング&ディベロップメント（2012）は、「リズムとは、ひとつひとつの音を、時間的な流れの上にならべたもの」、「音楽の全体を通して感じられる、規則的な調子」、「拍子は、リズムの基礎となるもの」としている。これらの例は、リズムの基礎をカウントや拍子として、すなわち、時間的な概念のみでとらえていると考えられる。

村田（2012）は、リズムを「音楽の3大要素の1つ。律動などと訳される。音楽の最も根本的な要素で、音の強弱長短の配置によって時間の流れに美的な秩序観を生み出す。拍子が一定の秩序を保ち、リズムはその拍子の中でなお自由な変化を行い得る。」とし、さらに「リズムにのる、グルーヴ（感）」に関して、「音楽のリズムに同調し、体をのせて踊ることで、リズムダンスの特性の中核となる。これに近い言葉にグルーヴ（感）があり、ある種の高揚感、心地よさを指す。機械的に均等なリズムで刻まれる拍子から、いかにずらすかの微妙な違いから生まれる。総じて、数字や記号で表しきれないリズムの感覚全体を指す。」としている。

このように、リズムのとらえ方が様々であるのと同様に、リズムの「のり・ノリ・乗り」に関する言説もまた様々である。

桑原ほか（2003）は、「ビート」を「音楽を構成する最小単位」とし、「のり」を「ビートをもとにしたリズムの流れに合うこと」としている。また、七類（1999）は、「ダンスでは、『タメ』で打つことで、リズムの『ノリ』を作り出す。タメをコントロールできるようになることが、リズムを作り出すことに直結している」と述べ、「タメ」という文言を用いてリズムの「ノリ」を説明している。さらに、日本ストリートダンス協会・エイベックス・プランニング&ディベロップメント（2012）は、「グルーヴ感」に関して、「ヒップホップなどの大衆音楽の世界でよくつかわれることば。『グルーヴ（groove）』はもともと『レコードの溝』という意味で、『たのしいこと・すてきなもの』などの意味もある。つかわれる場面によって、『カッコいい』『ノリのよい』『すばらしい』などさまざまな意味をもつ」としている。

一方、柳瀬（2014）は「『リズムにのるということ』は、音楽のリズムに『合わせる』ことと『くずす（変化させる）』ことの往還」であるとし、「音楽のリズムを枠組みとして、運動者がその枠組みを逸脱せずにどんな動きができるかを探求することであり、それがく

ずし（変化）となって表れてくる」と述べている。

ところで、先のリズム系ダンスが導入された時代に、山田（1992b）は、「われわれは、日常生活の中で、寝る、転がる…。その延長で、リズムにのる（身体を揺らす）のがダンスをすることである。体幹、体の方向を保持し、足でリズムに合わせたステップを刻み、手がそのリズムを補い、強調する。そして、左右にその運動を繰り返す。リズムにのることから、表現することが加わったダンスでは、表現内容を象徴する体の動かし方が必要となってくる」としている。また、原田（2011）は、「ダンスでは、体の中のリズムが音楽のもつリズムと一体化し、『こうしよう』とあらかじめ準備した動きではなく、次々に勝手に湧いてくる状態になったときに『乗っている』と言う」としている。そして、「ノル」ことを「体の中のリズム」と「音楽のリズム」が「一体化した状態」とし、「創作ダンスにおいて擬音語や擬態語で発声しながら表現するのも同じ原理である。『ノリ』を動きの生命力と言い換えることもできるだろう」と、「創作ダンス」におけるノリに関連づけて論述している。

このように、「リズムにのる」ということに関しても、音楽の拍子に同調すること、「合わせる」とことと「くずす」とこととの往還、「タメ」で打つことなどを、リズム系ダンスの特性の中核としてとらえるものと、一方、「リズムにのる（身体を揺らす）のがダンスをすること」とするもの、表現系ダンスにおいても同様にみられる「動きの生命力」とするものなど、多様なとらえ方がみられる。

一方、YO-SIN（2012）は、「現代的なリズムのダンスとは、ヒップホップダンスやロックダンスなどの現代的なリズムの曲で踊るダンス」としている。ここでは、学習指導要領解説などにおける「ロックやヒップホップのリズム」という音楽ジャンルとしてではなく、ダンスジャンルとしてとらえている。すなわち、学習指導要領解説などにおいて示されている「ロック」という文言は、いわゆる、Rock musicを意味するものであり、ストリートダンスのジャンルの1つであるLock danceとは異なるものである。しかし、このような「ロック」という同一のカタカナ表記によって生じたと考えられる誤謬の例は、他にも多くみられるものと推測される。

以上、中学校におけるダンス男女必修化を機に、関連する多くの著作物が出版され、リズム（あるいは、リズムにのること）、リズム系ダンスの取扱いに関する論議は益々多様に展開されていると考えられ、混乱の様相は益々拡大されているといっても過言ではない。

クラゲス (1971) は「リズム的脈動に乗ったときに (中略) リズムを形成する」と述べ、「情緒の動き」、「激情」という解釈についても繰り返し強調している。「表現運動・ダンス」の学習は、音楽や美術とは異なり、身体の動きでリズムを形成し、表現することを学習するものである。心と身体が「リズム的脈動に乗って」いるかどうか、このことをいかに見極めるかが、すべてのダンス教育に共通する最も重要なことと考えると考えられる。

## 5 まとめにかえて

本研究においては、学校体育における「表現運動・ダンス」に焦点づけて、リズム系ダンス導入を契機に生じたと考えられる様々な混乱を解決するため、あるいは、その内容論議を深める一助とするため、学習指導要領にみるリズムの概念を中心に検討した。

まず、辞典・事典、さらに学説にみるリズムに関して、リズムは、①自由 (変化)、②無意識的の反復、③周期的分節として、その一方、タクトは、①拍節的、②意識的の反復、③拍節上の区分として、対比的に位置づけられていると考えられる。そして、そのような対比的な位置づけのうえに立って、さらに「融合しうる」(クラゲス, 1971) という解釈が成り立つことも認識しておかなければならない。しかし、こういった解釈の成立そのものが、多くの混乱を引き起こす要因になっているとも考えられる。

現行の小学校学習指導要領、中学校学習指導要領の「表現運動・ダンス」領域以外の内容において、リズム (あるいは、リズムカルな) という文言は、「走り幅跳び」、「走り高跳び」、「ハードル走」などで用いられており、それらは、何らかの動き (あるいは、運動) の秩序や反復の概念で用いられていると考えられる。

一方、「表現運動・ダンス」領域の内容において、リズムは他の領域にみるそれとは異なり、主としてロックやサンバ、ヒップホップなどの音楽 (あるいは音楽ジャンル) の概念で用いられていると考えられる。また、「ロック (ミュージック)」を「ロックダンス」としてとらえるという、同一のカタカナ表記によって生じたと考えられる誤謬の例もみられるなど、混乱は益々拡大されているといっても過言ではない。

そして、リズムのとらえ方が様々であることに関連して、リズムの「のり・ノリ・乗り」に関しても様々な解釈がみられる。

そもそも、戦後、リズムは表現系ダンスの主要な概念として論じられてきた経緯があり、「リズムダンス・現代的なリズムのダンス」が学校体育に導入された当

初も、「創作ダンス」に関して、リズムや律動といった文言を用いて論議がなされていた。しかし、現行の学習指導要領などにおいては、表現系ダンスに関してリズムの文言が一切みられず、従前の学習指導要領などとの齟齬をきたしていると考えられる。また、バレエ、社交ダンス、ダンススポーツ、ジャズダンス、ヒップホップダンス、フォークダンス、創作ダンスなど様々なダンスが列挙されるなか、リズムダンスという文言がみられない事典 (こどもくらぶ, 2010) なども存在する。

前述のとおり、マイネル (1981) は、「運動リズムは音から“分離できる”」としている。様々な混乱を解決するためには、まず、リズムとタクトの関係を明確にし、他の芸術、他の運動領域とは異なる「表現運動・ダンス」領域に期待される動きのリズムの概念をとらえなおすとともに、「表現・創作ダンス」と「リズムダンス・現代的なリズムのダンス」との関係についても明示する必要があると考えられる。文部科学省 (2013) の実技指導資料には、「『表現・創作ダンス』、『リズムダンス・現代的なリズムのダンス』などの名称は、社会におけるダンスを背景にしながら、学校におけるダンスの内容として固有に用いられている名称です」とされている。社会におけるどのようなダンスを背景にし、学校においてどのように用いられているのか、また、その関係性について、より具体的に明示し、「表現運動・ダンス」領域の実践が一層発展するよう再検討することが必要であると考えられる。

## 【引用・参考文献】

- 浅岡正雄 (1990) 運動学用語解説。金子明友著者代表、運動学講義。大修館書店：東京、266。
- 福原淳 (1974) リズム。竹内敏雄編、美学事典 (増補版)。弘文堂：東京、327-332。
- 木場裕紀 (2012) 学習指導要領における学校ダンスのカリキュラム・ポリテクス～ジェンダー、カルチュラル・クラッシュを焦点に～。女子体育, 54 (4・5): 74-75。
- 土井涼子・川口千代 (2007) 「表現運動」領域における動きの内容別比較研究－「表現」と「リズムダンス」を事例に－。京都女子大学発達教育学部紀要, 3: 65-75。
- 福原淳 (1974) リズム。竹内敏雄編、美学事典 (増補版)。弘文堂：東京、327-332。
- 古川康成 (2011) 進んでコミュニケーションを取り合おうとする児童の育成：「習得・活用・探求」型学習スタイルを活用したリズムダンスの実践。教育実践



- 研究, 21: 179-184.
- 原田奈名子 (2011) 体幹部を中心に弾む動きでケンパー・グッパーからヒップホップへ. 全国ダンス・表現運動授業研究会編著, 明日からトライ! ダンスの授業. 大修館書店: 東京, 96-97.
- 伊大知崇之・村瀬航太 (2012) ダンスに入る前に. 菊池由見子監, オールカラー版 DVD 付き中学校ダンス指導のコツ. ナツメ社: 東京, 32-39.
- こどもくらぶ (2010) スポーツなんでも事典・ダンス. こどもくらぶ編. ほるぷ出版: 東京.
- クラゲス: 杉浦実訳 (1971) リズムの本質. みすず書房: 東京.
- 桑原淳子ほか (2003) 知っておきたい用語. 本村清人・戸田芳雄監, 松本富子編, 新しい課題に対応する中学校保健体育科の授業モデル3「現代的なリズムのダンス」編. 明治図書出版: 東京, 135-138.
- 松本千代栄 (1957) 舞踊美の探究 - 舞踊理論と指導法 -. 大修館書店: 東京.
- 松本富子 (2011) ダンスの学習. 全国ダンス・表現運動授業研究会編著, 明日からトライ! ダンスの授業. 大修館書店: 東京, 136-139.
- 松尾千秋ほか (2013) 『女子体育』誌にみるリズムダンス・現代的なリズムのダンスに関する動向と今後の課題. 広島体育学研究, 39: 11-24.
- マイネル: 金子明友訳 (1981) マイネル・スポーツ運動学. 大修館書店: 東京.
- 三浦弓杖・矢島ますみ (1997) 舞踊教育再構築 (V) - 日本における舞踊教育の可能性 - 学校におけるリズム型ダンスの学習過程 -. 千葉大学教育学部研究紀要, 1: 73-79.
- 文部省 (1969) 中学校学習指導要領. 大蔵省印刷局: 東京.
- 文部省 (1977) 中学校学習指導要領. 大蔵省印刷局: 東京.
- 文部科学省 (2008a) 中学校学習指導要領. 東山書房: 京都.
- 文部科学省 (2008b) 中学校学習指導要領解説保健体育編. 東山書房: 京都.
- 文部科学省 (2008c) 小学校学習指導要領. 東山書房: 京都.
- 文部科学省 (2008d) 小学校学習指導要領解説体育編. 東山書房: 京都.
- 文部科学省 (2013) 学校体育実技指導資料第9集 表現運動系及びダンス指導の手引. 東洋館出版社: 東京.
- 村田芳子 (1988) リズムとテンポ. 松田岩男・宇土正彦編, 学校体育用語辞典. 大修館書店: 東京, 336-337.
- 村田芳子・田巻以津香 (2012) 授業に役立つリズムダンスに関する用語解説. 教育技術 MOOK よくわかる DVD シリーズ新学習指導要領対応・表現運動・リズムダンスの最新指導法. 小学館: 東京, 60-61.
- 村田芳子 (2015) 今こそ「ダンスの学び」をすべての子どもたちに - ダンス必修化を機に求められる指導力の向上 -. 舞踊教育学研究, 16: 1-2.
- 村浦とく (1973) 舞踊創作とイメージ構成 - 主としてリズムとの関連について -. 明治図書出版: 東京.
- 中村恭子 (2009) 中学校体育の男女必修化に伴うダンス授業の変容 - 平成19年度, 20年度, 21年度および24年度の年次推移から -. (社) 日本女子体育連盟学術研究, 26: 1-16.
- 日本ストリートダンス協会・エイベックス・プランニング&ディベロップメント (2012) めざせ! ダンスマスター③リズムダンス. 岩崎書店: 東京.
- 野村良雄 (1966) リズム. 標準音楽辞典. 音楽之友社: 東京, 1364-1365.
- 大町倫子 (1991) 舞踊のリズムと動き. 片岡康子著者代表, 舞踊学講義. 大修館書店: 東京, 82-91.
- 岡野進 (2010) 陸上競技・運動の楽しい練習方法と指導. 公益財団法人日本陸上競技連盟編, 陸上競技指導教本アンダー12楽しいキッズの陸上競技. 大修館書店: 京都, 33-86.
- 七類誠一郎 (1999) 黒人リズム感の秘密. 郁朋社: 東京.
- 島内敏子 (2011) ダンスとは何か. 全国ダンス・表現運動授業研究会編著, 明日からトライ! ダンスの授業. 大修館書店: 東京, 134-135.
- 高橋健夫 (1999) 「学習指導要領 (体育)」改訂の要点と今後の課題. 女子体育, 41 (4): 47.
- 山田敦子 (1992a) ダンスの教材論. 松本千代栄監・編, ダンスの教育学第1巻. 徳間書店: 東京, 70-73.
- 山田敦子 (1992b) 高等学校の発達と動き・仲間・題材. 松本千代栄監・編, ダンスの教育学第1巻. 徳間書店: 東京, 175-180.
- 柳瀬慶子 (2014) 表現運動における「文化的な価値」に関する研究 - リズムにのるとということ - に着目して. 高田短期大学紀要, 32: 77-86.
- YO-SIN (2012) 現代的なリズムのダンス・ヒップホップ. 坂本秀子監, 初心者から指導者まで使えるダンスの教科書. 成美堂出版: 東京, 19-54.